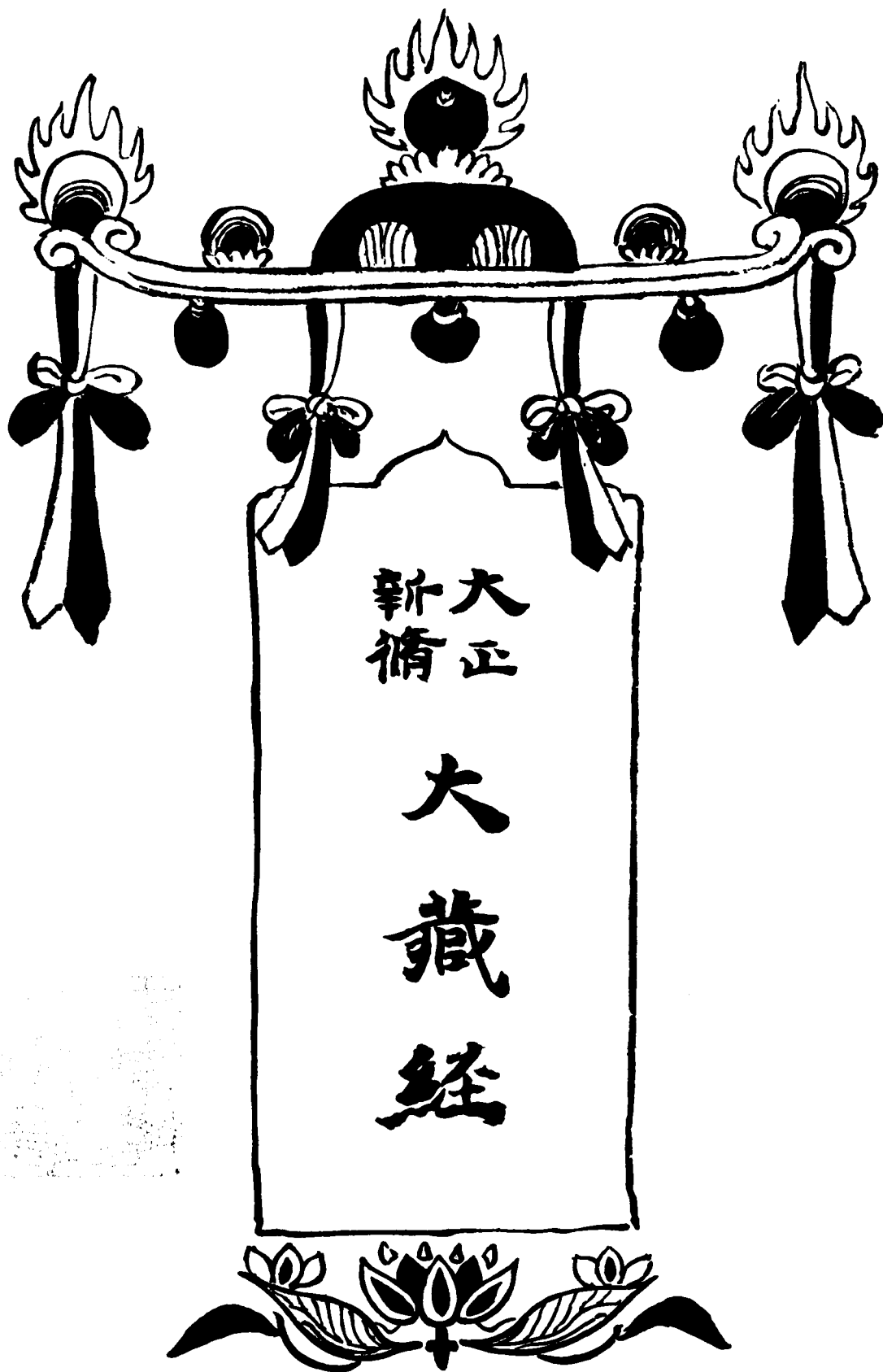




大正新脩

大藏經

略 符 (Abbreviations)

- ㊦ 宋,元,明,三本 (The 'Three Editions' of the Sung, the Yuan and the Ming dynasties)
- ㊦ 宋本 (The 'Sung Edition' A. D. 1239)
- ㊦ 元本 (The 'Yuan Edition' A. D. 1290)
- ㊦ 明本 (The 'Ming Edition' A. D. 1601)
- ㊦ 麗本 (The 'Kao-Li Edition' A. D. 1151)
- ㊦ 麗本別刷 (Another print of the Kao-Li Edition)
- ㊦ 正倉院聖語藏本(天平寫經)(The Tempyō Mss. [A.D. 629-] and the Chinese Mss. of the Sui [A.D. 581-617] and Tang [A.D. 618-822] dynasties, belonging to the Imperial Treasure House Shōsō-in at Nara, specially called Shōgo-sō)
- ㊦ 正倉院聖語藏本別寫 (Another copy of the same)
- ㊦ 宮内省圖書寮本(舊宋本)(The Old Sung Edition [A.D. 1104-1148] belonging to the Library of the Imperial Household)
- ㊦ 大徳寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Daitoku-ji')
- ㊦ 萬徳寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Mantoku-ji')
- ㊦ 石山寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Ishiyama-dera')
- ㊦ 知恩院本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Chion-in')
- ㊦ 醍醐寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Daigo-ji')
- ㊦ 仁和寺藏本 (Nianaji Mss. by Kūkai and others. C. 800. A.D.)
- ㊦ 東大寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Tōdai-ji')
- ㊦ 中村不折氏藏本 (Mr. Nakamura's Mss. from Tun-huang)
- ㊦ 久原文庫本 (The Tempyō Mss. belonging to the Kuhara Library)
- ㊦ 森田清太郎氏藏本 (The Tempyō Mss. owned by Mr. Seitaro Morita)
- ㊦㊦㊦ 鐵塚本 (Stein Mss. from Tun-huang)
- ㊦㊦ 西福寺本 (The Tempyō Mss. of the monastery 'Saifuku-ji')
- ㊦ 東京帝室博物館本 (The Chinese Mss. of the Tang dynasty belonging to the Imperial Museum of Tokyo)
- ㊦ 縮刷本 Tokyo edition (small typed)
- ㊦ 金剛藏本 (The Mss. preserved in the Kongō-zō Library, Tōji, Kyoto)
- ㊦ 高野版本 (The Edition of Kōya-san, C. 1250 A. D.)
- ＝ 作(異文……ニ作ル, 'Various reading')
- 例 (a) 得元明俱作相トスベキヲ得ニ相㊦㊦ (i. e. The Yuan and the Ming Edition read 相 for 得)
- (b) 一切衆生依得生長ニ諸衆生等依得生トスベキヲ(一切…長)八字ニ(諸衆生等依得生)七字 (i. e. For the eight letters (一切…長) read the seven letters (諸衆生等依得生))
- － 無(異本ニ(……)無シ, 'Omit' 'dicst')
- 例 宋元俱無心字トスベキヲ[心]－㊦㊦ (i. e. The Sung and the Yuan Edition omit 心)
- ＋ 有(異本ニ(……)有リ, 'add')
- 例 (a) 我下三本俱有時於彼遇值世尊七字トスベキヲ 我十(時於彼遇值世尊)㊦
- (i. e. The Three Editions add 時於彼遇值世尊 after 我)
- (b) 登上三本俱有我時於彼遇值世七字トスベキヲ (我時於彼遇值世)＋尊㊦
- (i. e. The Three Editions add 我時於彼遇值世 before 尊)
- * 下同(以下之ニ同シ, 上ニ同シ 'so below', 'so above,' 'et passim')
- 例 本文(Text) 世尊正 ㊦遊知
- 註 (Note) 遊三本俱作過下同トスベキヲ ㊦遊ニ過㊦* (i. e. The Three Editions read 過 for 遊, so also below)
- … 略(字句省略, 'Letters or Sentences left out,' 'down to')
- 例 (a) 彼依此處觀覺興衰八字トスベキヲ [彼依…興衰]八字 (i. e. 'From 彼依 down to 興衰, eight letters,')
- (b) 已上三本俱無彼依乃至興衰八字トスベキヲ [彼依…興衰]八字－㊦ (i. e. 'From 彼依 down to 興衰, eight letters are left out in the Three Editions.')
- ㊦ 異同(卷品ノ同異, 'Various division'), (文章ノ出入, 'Various sentence')
- ㊦ 位置ノ轉換('Interchange of position')

- 底本 (The MS. or book on which the printed text is based.)
- ㉑ 對校本ノ a (The first text collated.)
- ㉒ 對校本ノ b (The second text collated.)
- ㉓ 對校本ノ c (The third text collated.)
- イ 底本又ハ對校本註記ノ校異 (A various reading given in a note of the original text or the text collated.)
- 例 (a) 底本註記ニ止一本作正トアルヲ 止ニ正^イ● (i. e. In the original text (MS. or book) it is noted that a text reads 正 for 止)
- (b) 對校本 a 註記ニ止一本無トアルヲ [止]^イ—● (i. e. In the first text collated it is noted that 止 is wanting in a text)
- カ 底本又ハ對校本註記ノ考偽 (A correction given in a note of the original text or the text collated.)
- 例 (a) 底本註記ニ捐疑損歟トアルヲ 捐ニ損^カ● (i. e. In the original text (MS. or book) it is noted that 捐 may be a mistake for 損)
- (b) 對校本註記ニ如下疑有是字歟トアルヲ 如⁺(是)^カ● (i. e. In the second text collated it is noted that 是 is to be read under 如)
- ？ 本藏校合者ノ考偽 朋ニ明？ (i. e. An editorial note:—明 to be read for 朋？)

巴利語書名略號

(Abbreviations of Titles of Pāli Works)

- A. Aṅguttara-nikāya (Morris-Hardy ed. P. T. S.)
- Ud. Udāna (Steinthal ed. P. T. S.)
- It. Itivuttaka (Windisch ed. P. T. S.)
- Kh. Khuddaka-Pāṭha (Childers ed.)
- Jā. Jātaka (Fausbøll ed.)
- Th. 1. Thera-gāthā (Oldenberg ed. P. T. S.)
- Th. 2. Therī-gāthā (Pischel ed. P. T. S.)
- D. Dīgha-nikāya (Rhys Davids-Carpenter ed. P. T. S.)
- Dh. Dhamma-Pada (Fausbøll ed.)
- Nd. Niddesa (Stede ed. P. T. S.)
- Pv. Peta-vatthu (Minayeff ed. P. T. S.)
- Bv. Buddha-vamśa (Morris ed. P. T. S.)
- M. Majjhima-nikāya (Trenckner-Chalmers ed. P. T. S.)
- Vin. Vinaya-Piṭaka (Oldenberg ed.)
- Vv. Vimāna-vatthu (Gooneratne ed. P. T. S.)
- S. Saṃyutta-nikāya (Feer ed. P. T. S.)
- Su. Sutta-nipāṭa (Andersen-Smith ed. P. T. S.)
- Sumv. Sumanāgala-viṭāsini (Carpenter, J. P. T. S. 1885)
- Samp. Samanta-pāsādikā (Takakusu-Nagai ed. P. T. S.)
- ~ Pāli equivalent.

目次

一六九三	人本欲生經註(一卷) [cf. No. 14].....	東晉道安撰.....	一
一六九四	陰持入經註(二卷) [cf. No. 603].....	吳陳慧撰.....	九
一六九五	大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚(三卷) [cf. No. 220(10)].....	唐窺基撰.....	二五
一六九六	大品經遊意(一卷) [cf. No. 223].....	隋吉藏撰.....	六三
一六九七	大慧度經宗要(一卷) [cf. No. 223].....	新羅元曉撰.....	六八
一六九八	金剛般若經疏(一卷) [cf. No. 235].....	隋智顗說.....	七五
一六九九	金剛般若疏(四卷) [cf. No. 235].....	隋吉藏撰.....	八四
一七〇〇	金剛般若經贊述(二卷) [cf. No. 235].....	唐窺基撰.....	一二四
一七〇一	金剛般若經疏論纂要(二卷) [cf. No. 235].....	唐宗密述宋子璿治定.....	一五四
一七〇二	金剛經纂要刊定記(七卷) [cf. Nos. 235, 1701].....	宋子璿錄.....	一七〇
一七〇三	金剛般若波羅蜜經註解(一卷) [cf. No. 235].....	明宗瀚如玘同註.....	一二八
一七〇四	金剛般若波羅蜜經略疏(二卷) [cf. No. 236].....	唐智儼述.....	一三九
一七〇五	仁王護國般若經疏(五卷) [cf. No. 245].....	隋智顗說灌頂記.....	一五三
一七〇六	仁王護國般若波羅蜜經疏神寶記(四卷) [cf. Nos. 245, 1705].....	宋善月述.....	一八六
一七〇七	仁王般若經疏(六卷) [cf. No. 245].....	隋吉藏撰.....	三一四

(一) 序 品 (一)	三二四	(五) 護國品 (五)	三四三
(二) 觀空品 (二)	三二四	(六) 散華品 (五)	三四六
(三) 教化品 (三)	三三八	(七) 受持品 (五)	三四七
(四) 二諦品 (三)	三三九	(八) 囑累品 (六)	三五七

一七〇八 仁王經疏 (六卷) [cf. No. 245] 唐 圓 測 撰 三五九

(一) 序 品 (一)	三五九	(五) 護國品 (五)	四〇七
(二) 觀空品 (二)	三七九	(六) 散華品 (五)	四一二
(三) 教化品 (三)	三八六	(七) 受持品 (六)	四一四
(四) 二諦品 (三)	四〇二	(八) 囑累品 (六)	四二五

一七〇九 仁王護國般若波羅蜜多經疏 (七卷) [cf. No. 246] 唐 良 賁 述 四二九

(一) 序 品 (一)	四二九	(五) 護國品 (五)	四八七
(二) 觀如來品 (二)	四五一	(六) 不思議品 (五)	四九二
(三) 菩薩行品 (三)	四六三	(七) 奉持品 (五)	四九四
(四) 二諦品 (三)	四八二	(八) 囑累品 (七)	五二〇

一七一〇 般若波羅蜜多心經幽贊 (一卷) [cf. No. 251] 唐 窺 基 撰 五二三

一七一一 般若波羅蜜多心經贊 (一卷) [cf. No. 251] 唐 圓 測 撰 五四二

一七一二 般若波羅蜜多心經略疏 (一卷) [cf. No. 251] 唐 法 藏 述 五五二

一七一三 般若心經略疏連珠記 (一卷) [cf. Nos. 251, 1712] 宋 師 會 述 五五五

一七一四 般若波羅蜜多心經註解 (一卷) [cf. No. 251] 明 宗 渤 如 玘 同 註 五六九

一七一五 法華經義記 (八卷) [cf. No. 262] 梁 法 雲 撰 五七二

(一) 序 品 (一)	五七二	(四) 信解品 (五)	六三二
(二) 方便品 (二)	五九二	(五) 藥草喻品 (六)	六四五
(三) 譬喻品 (三)	六一一	(六) 授記品 (七)	六五一

(七) 化城喻品 (七)	六五一
(八) 五百弟子授記品 (七)	六五六
(九) 授學無學人記品 (七)	六五八
(一〇) 法師品 (七)	六五九
(一一) 見寶塔品 (七)	六六一
(一二) 持品 (七)	六六二
(一三) 安樂行品 (十)	六六二
(一四) 從地涌出品 (八)	六六六
(一五) 如來壽量品 (八)	六六七
(一六) 分別功德品 (八)	六七二
(一七) 隨喜功德品 (八)	六七三

(一) 法師功德品 (八)	六七四
(二) 常不輕品 (八)	六七五
(三) 神力品 (八)	六七五
(四) 囑果品 (八)	六七六
(五) 藥王本事品 (八)	六七六
(六) 妙音品 (八)	六七七
(七) 觀世音品 (八)	六七八
(八) 陀羅尼品 (八)	六七八
(九) 妙莊嚴王本事品 (八)	六七九
(一〇) 普賢勸發品 (八)	六七九

一七二六 妙法蓮華經玄義 (二十卷) [cf. No. 262]	隋 智 顗 說	六八一
一七二七 法華玄義釋籤 (二十卷) [cf. Nos. 262, 1716]	唐 湛 然 述	八一五

人本欲生經序

人本欲生經者。照于十二因緣而成四諦也。本癡也。欲愛也。生生死也。略舉十二之三以爲因也。人在生死。莫不浪滯於三世飄榮於九止稠繆八縛者也。十二因緣於九止。則第一人亦天也。四諦所鑒鑒乎九止。八解所正正于八邪。邪正。則無往而不悟。止鑒。則無往而不悟。無往而不悟。故能洞照傍通。無往而不悟。故能神變應會。神變應會。則不疾而速。洞照傍通。則不言而化。不言而化。故無棄人。不疾而速。故無遺物。物之不遺人之不棄。斯禪智之由也。故經曰。道從禪智得近泥洹。豈虛也哉。誠近歸之也。斯經似安世高譯。爲晉言也。言古文悉義妙理婉。觀其幽堂之美。闕庭之富者或寡矣。安每攬其文欲罷不能。所樂而玩者三觀之妙也。所思而在者想滅之辭也。敢以餘暇爲之撮注。其義同而文別者。無所加訓焉。

佛說人本欲生經

後漢安息三藏安世高譯

聞如是一時佛在拘類國行拘類國法治處。阿難記所聞聖教土也。法治處王城也。是時賢者阿難獨閑處傾倚念如是意生未會

有是意是微妙本生死亦微妙中微妙但爲分明易現。現當爲見也。是意微妙本句倒。便賢者阿難夜已竟起到佛已到爲佛足下禮已訖一處止已止一處賢者阿難白佛如是我爲獨閑處傾倚念如是意生未曾有是意是微妙本。本癡也。解癡者四諦之所照也。生死亦微妙。生死極末也。微明之諦達于末也。

中微妙。中者本末之間。九用諦燭之。之亦甚微妙也。但爲分明易現。現當作見也。言四諦觀十一因緣了了分明不難知也。

佛告阿難勿說是分明易知見深微妙阿難從有本生死是阿難從本因緣生死如有不知不見不解不受令是世間如織機躡撰往來言從癡者有是生死。至深至妙何得言易見乎。自有癡來經劫累身。悠悠者比丘有不了諦反視。如有者者萬無一人。曷云分明耶。從是世後世從後世是世更苦世間居令不得離世間。此說生死苦爲苦諦也。今死則後身生。生死猶晝夜。而愚者以生而感死類以成苦。

如是因緣阿難可知爲深微妙從有本生死明亦微妙。由生有死故故曰因緣達今世後世累繼生死故曰更苦明照三世故曰微妙也結苦諦也。

若有問有老死因緣問是便報有因緣何因緣阿難老死便報生故。死因于生習生。有十上知苦此推習也。

若有問有生因緣問是。有生因緣。猶生有所因不也。便報有因緣何因緣生有故爲生。生因乎三有也。

若有問有因緣有便報有因緣有何因緣有報受因緣有。因四受有三有。

若有問有因緣受報有因緣受何因緣受報爲愛求因緣受。言從前身習八愛故。中陰有四受。四受既受。則有今身。二世現故略而止與也。常習諦皆竟十二因緣具三世。癡人不知今世後世。故令運心彌綸三世。令知輪迴寤四諦也。故曰癡人以按計。按計本末本末爲藥。爲藥謂斯四諦也。

如是阿難從愛求因緣受從受因緣有從有因緣生從生因緣老死憂悲苦不可意惱生如是爲具足最苦陰。如是五事展轉相因則名習也。知五事苦爲苦諦也。愛別離苦在有胎苦生老悲腦眞爲苦數也。

從是有習。句倒也言從習有是苦也。生因緣阿難爲老死是故說是爲從是致有是。

是故從聖說從癡致行德生有是老死。當從是阿難分明爲生因緣老死。分明者諦了了知習也。諸言因緣皆習也。將欲反盡故。更推習併之也。

若阿難無有生爲無有魚魚種無有飛鳥飛鳥種爲無有蚊虻蚊虻種爲無有龍龍種爲無有神神種爲無有鬼鬼種爲無有人人種各各種。假知盡諦無有生者。何從得五道也。若知盡諦無有生者。何從得五道也。解。若知盡諦無有生者。何從得五道也。解。若知盡諦無有生者。何從得五道也。解。

盡諦真如心則生無有也。亦無有能令生有。一切阿難無有生為有老死。不阿難白佛言。不無生則無死。誠哉此言也。

佛便告阿難。從是因緣當知為從是本。從是習。從是因緣。老死為生。故生因緣阿難為老死。從是因緣。從是因緣發也。生也。解無無生。則不老死苦。不了無者。從四習生便有苦也。此四習與止。至愛還下異也。自是下結句皆反覆而成也。

生因緣阿難為老死 重結也

若有問有因緣生可報有因緣生何因緣生為有因緣故。從是因緣當知令從是有有因緣生。墮胎三有更有生十二因連之一世也。若阿難有因緣無有寧有魚魚種飛鳥飛鳥種蚊虻。蚊虻種龍。龍種神神種鬼。鬼種人人種各各種。解盡無有則無五道也。

如應應有無有亦無有者為有無有一切阿難無有為有。生不阿難言不。得真如諦。則便應有無有亦復有也。既以無有者為辟。有觀無有。如令群有一切無有。為有生不。反以質阿難阿難云。無也。

是故阿難從是發從是本。從是習。從是因緣生為有。有故從有因緣阿難為生。以作是四習故生。以有為本也。

若有問有因緣有便言有何因緣阿難有可報為受。因緣有因緣有如是分明為受。因緣有因四受則有三有也。

設阿難受因緣無有亦無有受。有一切阿難無有受。為有現不阿難報不。無有受緣亦無有

受現。當為見也。一切無受為有可見不也。如是阿難為從是起。從是本。從是習。從是因緣。令有受。受因緣阿難為有。有因緣阿難受。若不達無。便從四習也。令有受倒。宜言令受有也。

有因緣阿難受如是問對。為何有因緣有受可報。受因緣從是因緣阿難當知為受。因緣受有因緣阿難受句倒也。言有受因緣也。八愛心是則受胎也。

若阿難無有愛亦無有受亦無有當受一切阿難無有愛為有受。不亦有受名不阿難言不解無無愛。則無受及當受也。又反反以質文之常也。

如是阿難為從是發。從是本。從是習。從是因緣為愛。因緣受愛。因緣阿難為受。如是阿難為愛。因緣求。求因緣利。利因緣計。計因緣樂。欲樂欲。因緣發。求以往。愛因緣便不欲捨。慳以不捨。慳因緣便有。家以有家。因緣便守。不解則從是致是也。重結也。

從守行本阿難便有刀杖。從有刀杖便有鬪諍。言語上下欺侵。若干兩舌多非一致。弊惡法多非。弊法從守始起也。八愛之一也。

若阿難本無有亦無所守。亦無有守。一切阿難無有守。為有刀杖鬪諍。語言上下欺侵。若干兩舌多非一致。弊惡法不阿難言不。若解滅。不守於色。寧致若干弊惡。不質以明理也。云無所護。故無所守也。下亦無二字重合句耳。

如是阿難是從是發。是為本。是為習。是為因緣。刀杖鬪諍。語言上下欺侵。若干兩舌多非一致

弊惡法 並守不守二理已現。欲更舉四習合為守也。

從守故阿難便有刀杖鬪諍。語言上下欺侵。若干兩舌多非一致。弊惡法如是。但為多苦。為從五陰習致。不守者。不了色。而守之也。刀杖非一惡。即知大苦。苦諦也。思惟十二因緣。經十二事。一一皆有四諦也。諸習諦推本非一端也。不根十二而止。十六無漏。習盡二慧。五耶推本。叱則八愛盡有四習。以此推之。則可知也。又愛為穢海。眾惡歸焉。何但八耶。言八舉其龜耳。欲界蠢蠢。何互無煙。至乎不還。乃舉別耳。

家因緣令有守。是故為說是當從是知。阿難為家因緣守。由有妻室。則有重門。擊柝之守也。向使接連。高岸擊柝。何施也。故說者云。是上言爾也。

若家因緣無有已。無有受。當何因緣。有家一切家。因緣無有寧有家。不寧有刀杖鬪諍。語言上下欺侵。若干兩舌多非一致。弊惡法不阿難言不。不受此色人。無緣有家。無緣有家。寧有守。而惜刀大苦集不。

如是阿難從是有。從是本。從是習。從是因緣。令有守。為守故。從家阿難令有守。上從是有者。從家起有守也。以家本習。結因家守。成守因於家。亦顛倒相明也。

難捨慳。因緣令有家。從是因緣。有是當從是。因緣知阿難為難捨。捨慳。因緣令有家。腦因色欲。思存不捨。由之為家也。故曰是緣有是也。若難捨慳。阿難無有亦無有受。已無有受。事當

有慳難捨不。一切阿難慳難捨已無有寧當有家不阿難白佛言無有。無有受不捨受也。已無有受寧當有慳難捨。慳難捨已無有。寧當有家不。

如是阿難從是起從是本從是習從是因緣受家慳難捨故阿難令有家。是是慳惜心也。從往受阿難因緣令有慳難捨是故有是言亦從是因緣有如是當從是因緣阿難可解為從發受從是受慳難捨。即彼好仇因之甚惜。故曰往受令有難捨也。是故上說說從往有是慳也。

若阿難發受無有寧有受亦何因緣往受一切阿難無有發受寧當有慳難捨不阿難白佛言不。解無發往。則不有受與至彼也。普不往受豈慳惜也本未上。

如是阿難從是起從是本從是習從是因緣令慳難捨為發往受故亦為發有因緣故阿難受有慳難捨。從發習發遂至不捨也。

欲貪因緣阿難令有發是故說是當從是因緣阿難知為從欲貪因緣令發。姪貪內足則發而適彼也。

若欲貪阿難無有已無有因緣亦何因緣當有欲貪一切阿難欲貪無有寧當有發往不阿難言不。若行人解姪無有因緣。亦何計當有淫貪耶。普無貪心何有往受也。凡上云無有皆明因無有也。一切已下皆以因及緣無有。如是阿難從是發從是本從是習從是因緣令發為有欲貪故為從欲貪阿難令發。令發為有欲貪句倒也。

已發從發往令有欲貪是故為說當從是因緣知為從發往令有欲貪。此發往計技欲相造也。陰持入曰願。得往相也。即第三計也。故說者是故上說因計生貪也。

若無有發往阿難亦無有令發往一切阿難雖發往若有貪欲不阿難言不。假解無無住之因。亦住貪有生不也。如是阿難為從是有從是本從是習從是因緣貪欲為有發往因緣令有欲貪。解無如上若不解則如上為習也於皆結句。反復少發往二字也。

從是利故阿難令發往為從是說是當從是因緣知為從利因緣令發往。好利甚則思存往也是上說是當了利為往緣也。

若阿難以無有利亦無有求亦何因緣有求一切阿難已無有利寧當有發往不阿難言不。既解知利則無有利之求。何當有利求因緣耶。普無有利豈有發往乎。

如是阿難從是有從是本從是習從是因緣發往利故利亦發求從求因緣故令有利故說是從是因緣當知令從求因緣有利。此八愛或言故說。或云是說義不異也。以具文於上此二解之。故云是故首言爾也。

若求因緣阿難無有亦何因緣有求亦從何因緣求一切阿難以無有求若有見利不阿難言不。若求本無所因。亦何得求也。普無求者利可見不。

如是阿難從是有從是本從是習從是因緣為有利為有求故求故阿難令有利。或曰發曰

生或曰起或曰有。義同文別耳。

從發故令有求是故說當從是知令從愛求愛心內無求之由生。

若阿難無有愛亦無有求亦無有因緣求亦無有愛一切阿難愛無有寧當有求不阿難言不。諸因緣唯此一說反上。愛受中即若無有愛。下曰二無有愛耳。餘皆在一切上說。因一切下說。以因及緣。

如是阿難從是有從是本從是習從是因緣有愛故令有求求故令有愛。愛之滋長成乎八也。

彼阿難欲愛亦有愛是二皆痛相會。此推愛本文終也。欲愛色愛也。亦有愛非一也。經曰心可則為欲也。是兩愛痛為本為習為因緣。從痛發解如有則無也。相會猶相因也。

有痛因緣阿難若有問是便言有何因緣有便言更因緣有從是因緣阿難亦當知令更因緣痛。設問教答也。有六更故三痛由生也。

若阿難眼不更亦無有應當更眼亦不得更一切阿難眼已不更寧有眼更不亦有眼當因緣生不為樂為苦為亦不樂亦不苦阿難應不若眼知如有不更。眼亦無有。應作眼更者。一復不得此更也。普眼已不更。豈有眼更因緣生三痛不也。

如是阿難從是有從是本從是習從是因緣令眼更痛眼更因緣阿難令眼知痛耳亦如是鼻亦如是舌亦如是身亦如是心不更阿難亦無有當更亦無更因緣令心更一切阿難心無有更寧當有心更入因緣令有痛不令有樂不令

有苦不令有不苦不樂不阿難應不如是阿難是爲有是爲本是爲習是爲因緣痛令有更心更因緣阿難令有痛 更即有三痛呼阿難重結於比顛倒相明結言也

若有問有因緣更不對爲有何等更有因緣對爲名字因緣當從是阿難可知令從名字因緣更 更本應是六入。而今是名字六入同出六更。六更同出六情。六情之本則名字是故想曰名色也。亦應出經時失次也

若從所處有亦從所處應受令名身聚有 句倒云在所處四身爲在。所處三有也。將欲說無色。故云受之與有也。有受有乃有名色也

若阿難從所處有亦從所處應受無有爲有更有名字不阿難言不 如有知無受之與有豈有更而因名字耶

若阿難從所處有亦從所處應受無有今名身有無有寧當有對更不阿難言不 反覆明之上句云。豈有更因名字不此句言寧有名字與更對爲因也

一切阿難名字亦色身無有爲有更不爲從有更不阿難言不 此上三反問。於此一問云普無名色何從有更乎。天竺言質無嫌其悉也

如是阿難爲從是發爲從是是本爲從是是習爲從是是因緣從是是更令從是名字名字因緣阿難令有更 凡上云是因緣是有。次云無是則無取。後云從發習因緣即成上句從是有是故皆如是也

阿難有名字因緣設有問便對爲有何因緣名字謂識因緣爲有當從是因緣阿難解知爲識因緣名字 中陰淫識遂處胎有五陰

若識阿難不下母腹中當爲是名色隨精得駐不阿難言不 設無中陰淫識當有精。精住成名色不。名色已後至有中世也。識已前前世也。三世成十二也

若識阿難母腹已下不得駐去爲有名字得致不阿難言不識阿難爲本若男兒若女兒已壞已亡令無有爲得名字令增長令所應足不阿難言不 縱使中陰乘精入胎。或一二七日而亡。豈有此身耶。或成根男女及命便墮傷胎。寧得五陰身不乎。自下母胎則淫識也。一二七日男根女根已是名字之成

如是阿難從是起有從是本從是習從是因緣爲名字從識因緣阿難爲有名字 每至結句輒重者云名色從識注識爲名色因緣反覆言也

有因緣阿難識若問是便對有從何因緣有識名字因緣有識當從是因緣阿難分別解爲名字因緣識 惟識之本本當是行。而今言名字五大名識也。即六大癡也。有六大癡心作淫行。淫行中有識。共出六大故名字也

若阿難識不得名字駐已識不得駐得增上爲有生死苦習能致有不阿難言不 省文有似上乘望識入胎受有名字。身或七日或三根成而胎傷。寧滋長成十二緣不也。若當爾者與上不畢也。又此說無名字是無常之說。非盡諦言也。而今少行文亂。似出經時未皮

缺也。就而通之者云。大不信無癡豈得望行與望識不也。夫萬冥存乎癡。萬照存乎慧。故此經以癡爲本。以諦對也

如是阿難從是致 致生也。從六大生望識也

從是本 望識以六大爲從是習 習癡以成識也

從是因緣 因癡有識緣也。上二十事實有十八皆然也

識令有名字名字因緣有識 十二事窮此是如是爲識因緣名字名字因緣識止是說名止是處對止是諍本現當從有慧莫受 稱名字反覆而結之。云止是者十二事終是說名字處也。對止是者上諸云便對也。諍本見者三耶見也。墮耶見則失正觀。正觀四慧也。現當見也。故曰諍本。見當從慧莫受也

幾因緣阿難爲計痛是爲身阿難言是法本從佛是法正本佛自歸本佛願令佛說令從佛說是說受解利佛言聽阿難善哉善哉諦受念佛便說賢者阿難應唯然從佛聞佛便說是或阿難有見是痛爲身 失憂三更而愚墮爲身

或有見是痛計非身但爲身更痛法見是爲身但爲已上稱痛而云無也。此云身更痛法與漏分布三痛身更知同也。上三痛亦皆云更知也。以身更爲異耳

或一身爲是痛見不爲身亦不爲痛法見痛法計是不爲身但爲見是身爲身 但爲已上亦稱上二事云無也。見後解中云不覺。乃後問解三事亦云見也。覺見義同耳。但有有爲異

也。不解也。覺悟之稱也。漏分布曰三痛心更知。似其事也。若不爾者。宜言三痛覺由身也。上言三痛更由身也。猶六覺六更也。此下散說爲三痛病。其文亡而錯。得下慧心解三事之重釋。以大此非其事也

彼阿難或爲在是痛計爲身。由痛而修身也。此卽下道慧解痛文也。而連續此爲痛病也。

當爲對說是。此文意稱上計痛爲身者。辟而執之也。下色重解不稱爲賓主也。

是痛賢者爲三輩有樂痛有苦痛有不樂不苦痛是賢者三痛見何痛應作身樂痛時阿難是時二痛已爲滅爲苦亦不樂亦不苦是時但爲樂更樂痛阿難非常苦要滅樂阿難痛已滅離身不在身計。將明無身。故云痛有三而身一。何適爲身耶。欲言樂痛是身。當其親樂則無苦與不樂不苦三痛。而今一樂非身明矣。又令應謔觀其常。身死敗滅以諦照之。復非身明白矣。

是如是是時阿難苦痛便時是時爲兩痛已滅爲樂亦苦是時但爲更苦痛苦阿難痛非常苦盡法苦阿難痛已盡身不復更知是時阿難與樂痛同義不別解也。此中樂亦苦。苦上少三字。宜言樂亦不樂不苦也。便字從宜爲更也。

亦不苦亦不樂不更是痛是時兩痛滅痛亦苦但爲是時不苦不樂更是痛不苦不樂阿難痛法非常苦盡不苦不樂阿難痛已盡應無有身自有是計或阿難爲行道。亦同上二義也。長

下不字也。中云痛亦苦。宜云樂亦苦也。不大樂不大苦中人也。

爲是非常法痛爲計見身或有阿難爲行道常觀三痛計身之見也。

放散樂苦痛爲自見計身如是阿難因緣不應可爲痛作身見身。得明慧觀則三痛放散因緣。長息永。無痛之作身想。

彼阿難或不痛計見是身但爲身法更痛。但爲上稱痛而云無也。但云身更痛者身歷三痛而作身也。漏分布曰。三痛身更知。卽此事也。

便可報若賢者無有痛更亦不見所更寧當應有是不。上更痛計爲身。佛教答曰。尚不痛計身。寧猶有身更可修身耶。上痛更稱反身更法。身更法言所更約耳。言二不見似盡滅也。設問對計非身。寧應是法更。

是時阿難比丘不痛爲見計非是身寧應是法更痛亦見是身不阿難言不。既教答無痛更無緣修身。又反以質阿難也。不痛爲見計非是者。言第二身更痛無第一痛計身也。二與三都無非常盡滅直言。寧應者。此二事皆仍上三痛。故云寧。寧者既兩痛滅。安得獨稱身耶。雅理並羅義不雙立也。

如是阿難是因緣亦不應亦不可令或一無有痛計是身。但爲身更痛。但爲已上亦稱也。反稱結句也。

彼阿難所不計痛爲身亦不見是痛非身。將說第三云無第一也。

亦不身更痛亦痛法不見不計是身。云無第二也。

但爲計我爲不覺是身是身。覺見也。覺三痛計爲身也。云不覺覺也。

便可報一切賢者自計身。計獨覺也。覺是身也。

不更痛。句倒也。卽無第二也。

寧應有身不。此言自覺身爲身不更痛法。又不痛計身三名並寧應獨覺身是身耶。獨上三痛何痛應作身也。當一兩滅何得並稱也。

是時比丘不痛爲身身亦不更痛痛法亦不爲身有身。二無第一第二也。

但爲不覺身耳如是觀身寧應身不阿難言不云三事並列。何得獨有身也。上設問對此問阿難。

如是因緣阿難不應令無有痛爲身亦不身爲更亦不應法爲身亦不應不覺身爲身如是阿難一切痛爲作身已痛見見是身。事無適作身也。

幾因緣阿難或爲行道不爲痛作身爲見不見身阿難報是法本從佛教令亦從佛願佛爲說佛說已弟子當受令是說當爲解利佛告阿難聽是受是諦受重受念是當爲說如是賢者阿難從佛聞佛便說是有阿難比丘不爲痛作身亦不見痛爲身。行者得四非常解盡諦慧者。不計三痛而有身也。既不計三痛則不快痛之見。著身想也。

亦不爲身更亦不痛法計爲身。分痛法耳宜合痛法。亦上三痛但身更。知心更知望得知爲異也。

亦不見身見爲身。見覺也。上身更此身覺

爲異耳

亦不從或有是身亦不從是見見是身已如是見不復致世間令不復受世間 有是身者故上計痛有是身也。撮三事之二云既無半。則不致受世間也。致至也

已不復受致世間便不復憂已不復憂便無爲度世便自知爲已盡生義病死憂已畢 三痛身盡則不致不受十一苦也

行已足所應作已作不復還在世間齊是阿難或爲行道不計痛爲身自方便作亦不見見爲身 齊至也。至此身最後竟身也。身則畢於此不受更身。故曰不還世間也

幾因緣阿難或爲行道爲色作身阿難報法本從佛教令亦從佛願佛爲說佛說已弟子當受令是說當爲解利佛告阿難聽是受是諦受重受念是當爲說如是賢者阿難從佛聞佛便說是有阿難或爲行道爲少色行爲身 少貪身不乃慍動

阿難或爲行道爲不少色行爲身 將及二勝一無也

亦色無有量行爲身但爲少不色行爲身 但爲二字宜上在色無量上也。不爲少不色重勝焉也。無量者慍動貪內外色也

或有阿難爲行道亦不爲少色亦不爲無有量色 騰無第一第二及三也

亦不色少行爲身 不色小及第一也內不少貪外微著也

或有阿難爲行道亦不爲少色亦不爲無有量色亦不無有少色行爲身 騰無上三

但爲不色無有量行爲身 反第二也。內不色無有量外慍動也

彼阿難或爲行道少色行爲身現在阿難或爲行道少色行爲身已身壞死令復見身相像如是不爲是對行對如是致亦如是齊是 現在猶是計貪。少計貪少色以起者。身時雖身死亡。續貪身思存想像未知繫癡行道。不應與此爲匹。而愚與俱以致此身此而還也。對匹也俱也。齊至也。死而不解無常也

阿難或爲行道少行爲身自方便計作齊是阿難或爲行道少行爲身令結使 自計方便方便貪色命終不絕也。不自坊閑至此而止故爲身結身使也上自計方便如當過下寧也可無一條耳此說病耳而云行道當知也

彼阿難或爲行道不少色爲作行身但爲色無有量計作爲是身現是阿難或爲行道色無有量爲計作身身已壞死令復現身相像如是不爲是對行對如是致亦如是齊是阿難或爲行道爲計身身色無有量齊是阿難或爲行道令色無有量爲身令使結彼阿難或爲行道不少色亦無有量色計但爲念少色爲身現在阿難或爲行道不色少爲計身身壞死令復見身相像

如是不爲是對行對如是致亦如是齊是阿難或爲行道不色少自計爲致身齊是阿難或爲行道不色少令身使結彼阿難或爲行道亦不色少亦不色無有量亦不無有色少亦不無有色無有量爲墮行身現在阿難或爲行道亦不色少亦不色無有量亦不無有色少亦不無有

色無有量爲計墮身已身壞死令復見身相像如是不爲是對行對如是致亦如是齊是阿難或爲行道不色無有量自計爲致身齊是阿難或爲行道令不色爲使結齊是阿難或爲行道自計爲致身身幾因緣阿難爲行道色不行作身阿難報是法本從佛教令亦從佛願佛爲說佛說已弟子當受令是說當爲解利佛告阿難聽是受是諦受重受念是當爲說如是賢者阿難從佛聞佛便說是或阿難爲行道或不爲色作身 計四大有身相也都曰也

色無有量爲計墮身已身壞死令復見身相像

如是不爲是對行對如是致亦如是齊是阿難或爲行道不色無有量自計爲致身齊是阿難或爲行道令不色爲使結齊是阿難或爲行道自計爲致身身幾因緣阿難爲行道色不行作身阿難報是法本從佛教令亦從佛願佛爲說佛說已弟子當受令是說當爲解利佛告阿難聽是受是諦受重受念是當爲說如是賢者阿難從佛聞佛便說是或阿難爲行道或不爲色作身 計四大有身相也都曰也

亦不爲色計爲身 少色也脫少字。云解道行者不起小色而滯身也

亦不爲色無有量 量多著四大息此多色也亦不爲色少 爲下小無字也。無色小反第一也。亦息此結也。十報內無有小色外見小端正也

亦不爲色無有量計爲身 爲下亦少不字也此反第二也。行諦亦癡之也。十報內不念不趣端正外見色不趣端正色也

彼阿難爲行道不少色爲作身亦不爲計是身如道行道行諦也。得此慧者忘少著四大色也

現是阿難爲行道不爲少色作身亦不爲墮是身已身壞死令不復見是身相像 現是猶是時也。是行時不貪小色見身非常滅盡永絕。今身著色之想也

不爲是對行對如是是無有齊是 對今身後也無有身猗之二至此一也

阿難爲行道爲不少色爲身亦不計爲是身齊

彼阿難或爲行道不爲色無有量爲身亦不作色爲身現在是阿難爲行道不色無有量爲身亦不計是身已身壞死令不復見身相像不爲是對如是如是是爲無有是齊是阿難爲行道不色無有量爲身亦不墮計是身齊是阿難爲行道不行不色無有量亦令不使結齊是阿難或爲行道不行不色無有量爲身亦不成身亦不墮計是身亦有是七處阿難令識得駐亦有二受行從得解 三道則張欲界爲五并三界天爲一。九神止處。則分色無色。合欲爲一也。論五道者。以流浪受苦爲失故精說三惡道。總天爲一也。說九止者論能弘教受三觀者故自人始不及三苦也。分一受者精粗相從觀法不異也。二受皆居滿畢之位故有解名也

有色爲令從是有若干身若干思想辟或人或

若阿難行道是識止處已知 知欲天及人陰
持入身爲本也
亦知是識從是習 習天及人識不能捨也
知者慧也
亦知從是沒 沒盡也 從天及人身天下滅
者。諦知如筏曰盡也

亦知是從得出要如有知 出要法言言得要
生盡也。故七處曰欲能治能棄能度也。盡諦
有四事出要是其一也。凡六事皆曰知。行道
諦之慧也。六事皆曰是。是六天已下及人
身識所依也。七處三觀經。一皆知五陰之一
而陰有六情也。一一皆知陰。陰有習三四知
陰盡行道。又曰。亦知色味亦知色出要。此七
處也。三觀者。觀身色觀五陰觀六情也。三觀
即七處之每第一陰入也。言以道諦盡諦苦
出要諦。觀陰人及樂而陰之也。五陰罄盡經
以五陰爲五習盡爲七處味苦出要爲三觀。
文小異大同身三經唯七處三觀經有道諦二
經皆七事而已。然俱曰行道亦道諦也。皆曰
知亦諦也。如至識知。或曰。如本知知非諦何
也。知觀同義也。九九止即天身爲觀地習天
之習天之神會滅行道味樂天樂天樂樂必有
苦能斷天貪可名活道故曰出要也。皆四諦
觀觀九處也。所謂微而顯約而具也。十報單
用陰習盡而止也。

是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可
應住處阿難言不 若行道慧。以四諦觀觀
人身。寧有貪求望想此住止處不。答曰無也。
彼阿難第二識止處爲從色行因緣行道若干
身一想辟天名爲梵身長壽本第一在處。始
行一禪生四梵。名梵小梵無量大梵梵輔。身

不相類故曰若干身。猶此人之優劣也。心未純一故曰非一也。

若阿難行道是識止處以知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知是從得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不彼阿難第三識止處爲從色行因緣行道一身若干想辟天名爲明若阿難爲行道是識止處已知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知是從得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不 進行二禪。以知養恬陰乎念持。生此四明天。身表光相混然大齊。心猶不一故曰若干也。

彼阿難第四識止處爲從色行因緣行道一像身一思想辟天名爲遍淨若阿難爲行道是識止處已知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不 此是第三天也。宜言淨天天也。容表障炎四天。若一其心恬豫恒遊禪思故曰一。

彼阿難第五識止處爲從不色行因緣行道一切從色得度地想已沒無有量空空慧行受止辟天名爲空慧若阿難爲行道是識止處已知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不 地者悲滅心如地也。想已沒

斷求也無量空也。

彼阿難第六識止處爲從不色行因緣行道一切從空慧度識無有量受慧行止辟天名爲識慧若阿難爲行道是識止處已知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不空識定者。觀對識空不本來也。

彼阿難第七識止處爲從不色行因緣行道一切從識慧度無有量不用已捨受慧行辟天名爲不用受慧行若阿難爲行道是識止處已知亦是識止處從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道所識止處可應求可應望可應住處阿難對言不 色悲求生生而即遣。不俟終日觀而後知也。不用觀也。

彼阿難第一受行從得解有從色因緣行道無有想亦不受辟天名不思若阿難爲行道已知是從受亦知從受習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道是受行從得解可應求可應望可應住處阿難對言不 不思無結愛天也。四阿那含之第四天也。四阿那含愛身生第四禪六增之第二已上四天。此無漏第四禪局也。四禪之第六天名愛勝。是無思天共在一天上耳。

彼阿難第二受行從得解有從不色因緣行道一切不用從慧得度過無有思想亦未離思想爲受行止 正受定也。

辟天名爲無有思想解若阿難爲行道是受行從得解已知爲是解從是習亦知從是沒亦知是所樂亦知是更苦亦知從是得出要知有知是時阿難爲行道是受行從得解可應求可應望可應住處阿難對言不 無想者。知空而制想不令起也。此上八止皆如應知此八處。亦知八處習。亦知八處盡。亦知八處樂。亦知八處苦。亦知八處要得出義同故不二訓之也。

若阿難爲行道如是知如是見說爲不知不見若有是結使是時應說爲常是時應說非常波羅門云斷滅見常也。

是時應說世間有本是時應說世間無有本本要也。有要無要耳。

是時應說得道以死復生是時應說得道不得死 或見七反生死者故曰死復生。或至尼惟先天者故曰不死也。

爲有無有 或曰有度世。或曰無度世。

度世死從是結使是時阿難爲行道是七識止處二受行從得解如是如有從諦慧見從是意已解已得解脫是名爲阿難爲行道無所著從慧得解脫 反稱得道不得死。是五耶結使。經乎九止行者。以四諦觀之。長得息解。成阿羅漢也。

亦有阿難八解脫處何等爲八色觀色是爲第一解脫處 內外身著觀兩事也。

內觀色不想外觀色是爲第二解脫處 徧著外身也。

觀三十六物淨身受觀行止是爲第三解脫處。

四大爲色矣。顯與色違。心盛情痛。六情同義矣。

十現色入爲何等。一眼二色三耳四聲五鼻六香七舌八味九身十樂是爲十。現色入是名爲色種。樂愛也。種栽也。謂六欲興。即身栽生。隨街。受形。今之群生。皆街使然。故曰種也。

痛種爲何等。痛種爲身六痛。一眼知痛二耳知痛三鼻知痛四舌知痛五身知痛六心知痛。是爲身六痛名爲痛種。思想種爲何等。思想種。爲身六思想。一色想。色義與上同矣。

二聲想三香想四味想五更想六法想。心念善即善法興。惡念生。即惡法興。夫心者。衆法之本也。法句經曰。心爲法本斯也。

是爲身六思想名爲思想種。行種爲何等。街種名爲身六更。志之所往至輒更之。故曰更矣。

一色所更二聲所更三。香更四味所更五。觸所更。通身也。謂六情通著身。故曰通矣。

六法所更是爲身六更是名爲行種。識種爲何等。識種名爲身六識。眼識耳識鼻識舌識身識。心識是爲身六識是。名爲識種。名爲五陰種。

師云。五陰種身也。身有六情。情有五陰。有習眼爲好色轉中色轉惡色轉三色。色有五陰。并習合爲十八事。六情各然。凡爲百八結。滅此生彼。猶穀種朽于下。栽受身生于上。又猶元氣春生夏長秋萎冬枯。百穀草木。喪于土上。元氣潛隱。稟身于下。春氣之節至卦之和。元氣悄躬于下。稟身于上。有識之靈。

及草木之栽。與元氣相含。升降廣興終而復始。輪轉三界無有窮極。故曰種也。

當知是是從何知。爲非常苦空非身。從是知亦。有二知。一爲慧知。二爲斷知。從慧知。爲何等。爲非常苦空非身。是爲從慧知。從斷知。爲何等。愛欲已斷。是爲從斷知。乾。有終始。群生有興廢。成者必敗。盛者必衰。謂之非常。生老病死。履邪受罪。謂之苦。群生未有厥本自空。

今有幼終成必空。謂之空。身爲四大終各歸本。非已常實。謂之非身。深。諸四事之原。別厥欲之歸。輪迴三界。捨身受身。積苦無量。持志於正。觀空三界。欲速于本。無。諸苦寂滅。謂之慧知。明度經曰。癡者以非常苦空非身爲常樂。有身明度變之。故曰大明。

陰。貌爲何等。積爲陰。貌足爲陰。貌。積聚也。謂心默積聚五陰。盛滿足六情衆苦也。譬如物種名爲物種。木種名爲木種。火種名爲火種。水種名爲水種。一切五陰亦如是。物木火水各有本名。木自名木。以譬五陰。六情本名亦然。

有十八本持。師云。心爲衆之本主。持諸欲。故曰持。

十八本持。持何等。一眼二色三識。眼與識合。識別好醜。六情義同。老母經曰。眼見色即是意。意即是色。了本云。佛說爲眼從色令識生。斯義如之也。

四耳五聲六識七鼻八香九識十舌十一味十二識十三身十四更十五識十六心十七法十八識。是名爲十八本持。已知是從何知爲非常。

苦空非身。是爲知。從是知。亦有二知。一爲從慧知。二爲從斷知。從慧知。爲何等。愛欲已斷。空非身。是爲從慧知。從斷知。爲何等。或言無。

是。爲從斷知。彼爲具足。具足爲何等。或言無有餘具足。師云。彼彼街家也。衆欲已斷。三十七品即現矣。高街具者。邪向都盡。無復有餘也。

已無有餘。令眼明見明。明眼慧明也。見明天眼也。天眼者。道明即足。道眼足者。即無不睹。目連謂魔曰。吾以道眼觀內。天眼睹表。內外清淨。過天琉璃。何微塵而不睹乎。故曰眼明見明矣。

一街者。說是已爲斷。眼本耳本遍說如是。一道也。是二三十品也。本六欲本也。遍諸也。道街者。云。夫得三十七品之淨街者。五陰六本諸欲皆斷。

卒名爲本持。卒。遂也。持六情與色聲香味細滑。可心之榮相持。遂名之爲本持矣。譬是人爲多熱。如是。名。多熱。譬時疾病。重通身皆熱。由人已受十八本持。識神輪轉。更五陰六本諸入。以招憂悲苦。不如意惱合。聚衆苦。其爲是足矣。

譬喻是爲具足。亦有十二入何等。爲十二自身。六外有六。自身六爲何等。一爲眼。師云。眼見色有三事。六情皆然也。心意識爲本也。一念二作三求。念。屬心。作。屬意。二不屬識。所爲善惡。不過是三事。

耳鼻舌身心。是爲自身六入。外有六。爲何等。色聲香味更法。是爲十二入。一切從何知。爲非常。

①[現]一② ③受二④ ⑤(名)十⑥ ⑦也二⑧ ⑨[行種]一⑩ ⑪香十(所)⑫ ⑬觸二⑭ ⑮通二⑯ ⑰(名)一⑱ ⑲元二
無⑳ ㉑[從]一㉒ ㉓《二坤》㉔ ㉕諸二賭㉖ ㉗說二眼㉘ ㉙[也]一㉚ ㉛[爲]一㉜ ㉝爲二名㉞ ㉟名二名